

## こっちの庭は救われたが

何事にもスピードと効率が重視される時代にあって、私のような者はおそらく化石のような存在なのだろう。しかしながら、おおかた無駄になることを承知していても、やはりひとこと言い置かずには居られない。

いきなり何の話かと思われるかもしれないが、馬出キャンパス最古の建造物である基礎研究A棟(以下A棟)の改修にまつわる話をしておこうと思う。A棟というのは要するに旧内科棟のことで、第二内科が昔入っていた南側の3階に我々は今住んでいる。

事の起こりはもう2年以上前になるだろう。初め聞いたのは、老朽化したA棟を改修して使いやすくかつ美しくしようという話であった。A棟が見栄えよく蘇り、キャンパスのシンボルとして永久保存されるというので、当初は心から喜んでいて、ところがこの話には伏兵が潜んでいた。病院の移転に伴い旧病院内の食堂がなくなるため、キャンパスに食堂が乏しくなる。そこでA棟の中庭の片方、それも南側(つまり旧第二内科側)を潰して食堂を建設しようというのである。

ご存じのようにA棟は「日」の字型をしている。長い回廊で二つの中庭を囲む構造になっていて、このシンメトリックな中庭の存在によって比類無い造形美が保たれている。キャンパスの中心に位置し、将来の長きに亘ってシンボルとすべき左右対称の美しい造形が、一時の都合で破壊される。こんなことが許されていいのだろうか。片方が残るからいい、外から見えないからいいというものではない。シンメトリーを破壊すれば、もはやA棟を保存しているとは言えなくなってしまう。

今A棟には基礎系の約10教室が入っているが、A棟は基礎系教室だけのものではない。新病院が完成した後もキャンパスのシンボルとなる建物であり、外部の客人を真っ先に通して披露すべき場所である。それをなぜ、あえて潰そうとするのか。

理由は金である。A棟改修と一組にすれば予算が付くというのである。旧病院の食堂が本当に無くなった後だと、果たして食堂建設の金と場所が確保できるかどうかわからない。だから今がチャンスだというのだ。悲しいことに今は資金の問題が全てに優先される時代なのである。

それでも、何とかA棟の外観を守って欲しいと私は主張してきた。単なる懐古趣味ではない。中庭を潰すデメリットはシンメトリーの破壊だけに留まらない。美しい緑地がまた減るのだ。今は整備が行き届かず雑草が多くてわかりにくいけど、A棟の中庭は大変美しいスペースである。A棟改修と同時に整備すれば、まさにキャンパスのオアシスとなる空間である。我々にとっては、大学院新生や研究室配属学生の歓迎会を戸外でやれる貴重なスペースでもある。

ただし、不幸中の幸いと言おうか、私の意見が容れられたわけでは全くないのだが、結果的には南側の中庭は潰されずに済みそうだ。A棟改修後の教室配置についての話し合いが重ねられるうちに、どうしても解剖学実習室を南側の1階に置かざるを得なくなった。その結果、食堂は反対側、つまり北側の中庭に作ることとなったのである。シンメトリーが壊れることに変わりはないので、私としては決して賛成はしていないが、北側を潰すことについてはそちら側の教室が反対していない以上、隣がとやかく言う問題でもあるまい。ともあれ、第二内科の方々にとって懐かしい存在であろう、こっち側の中庭は残されることになったわけである。

キャンパスから緑地が次々と消え始めて久しい。以前、金関毅佐賀医科大学副学長(当時)が嘆いておられたことを思い出す(注)。緑地は決して無駄なスペースではない。豊かな教育環境を育むためには緑地が必要なのである。このキャンパスが学生の目に魅力的に映らなければ後に続いてくれる人が育たない。緑地は我々教員が学生と語り合うことのできる貴重なスペースである。A棟中庭のように静かな緑地はなおさらだ。

緑地ではないが、保存されていた旧解剖学講堂が新病院建築で失われたことを九大に戻って来て知った時は、愕然とした。テニスコートを壊して建設した総合研究棟についても、A棟にあまりにも隣接しすぎているので周辺の外観がいびつになってしまうと言ったこともあるが、決まったことだからと一蹴された。緑地や遺構などというものは、失って初めてその価値がわかるものだ。しかも誰にでもわかるのは、たいてい何年も先なのだ。

つい最近、今年も学生の歓迎バーベキュー会を中庭でやった。取りあえずこっち側の庭は救われたので、会の場所を奪われることは免れたわけだが、この先も似たような問題がいつ起きても限らない。目先のことだけしか考えられない大学人しかいなくなったとすると、大学といえども早晚滅ぶしか道はないのではなからうか。

注)金関毅:医学部のキャンパスに思う、『学士鍋』第73巻、1~2頁、1989年